

発見された55例を除いた103例を検討対象とした。また、治療法の違いにより前期（積極的外科切除, 1967-84）、中期（骨髄移植を行わない大量化学療法, 1985-96）、後期（骨髄移植を用いた大量化学療法, 1997-）に分けた。各時期の生存率の比較では後期において有意に改善されていた。更に進行例での検討でも、前期に比べ中・後期で有意に生存率が改善していた。骨髄移植を用いた大量化学療法の有用性が示されたが、前期と中期では10年以上経過しても生存率は plateau とならず、二次癌の発生など長期フォローの重要性和長期生存例の問題点が再認識された。

10 小児腹部鈍的外傷4例の経験から

金田 聡・広田 雅行・内藤万砂文
長岡赤十字病院小児外科

【はじめに】小児における腹部鈍的外傷は、その重症度に比し、初期症状が軽度で、診断に苦慮する場合がある。我々が経験した、確定診断までに時間を要した臓器損傷を伴う小児腹部鈍的外傷4例を報告する。

〔症例1〕7歳男児。臍損傷。

〔症例2〕6歳男児。臍損傷。いずれも、初診時の症状は軽度であったが、高AMY血症を認めたため臍損傷が疑われた。画像（CT）による診断確定は翌日であった。

〔症例3〕9歳男児。十二指腸穿孔。症状が軽度のため様子観察となり、確定診断は4日後であった。

〔症例4〕9歳男児。小腸穿孔。3回目のCTにて確定診断が得られた。

【まとめ】小児鈍的外傷では、初期には診断が困難な場合があり、経時的に経過を観察することが重要である。

11 嘔吐が主症状だった横隔膜ヘルニアの1例

近藤 公男・大澤 義弘
太田西ノ内病院小児外科

症例は39週、3260gで出生した3生日の女児。

哺乳開始後より頻回の吐乳あり。胸部X-pで左肺野に異常陰影を認め、横隔膜ヘルニアを疑われ当院紹介、入院。全身状態は良好。腹部X-pでは拡張した胃の一部が左下肺野まで挙上していた。腸管ガス像はほとんど認めなかった。上部消化管造影では胃は逆α型を呈し、挙上した幽門から先に造影剤が流出せず。注腸造影では脾彎曲部結腸の挙上を認めた。以上より、横隔膜ヘルニアもしくは横隔膜弛緩症、および胃軸捻転症を疑い、翌4生日に開腹術を施行。少量の腹腔内出血をみとめ、大網出血が疑われた。左横隔膜の後外側に3×5cmの欠損を認めたが、腸管の陥入はなし。また胃の軸捻転も自然整復されていた。本症例では胃が胸腔内に脱出する際に軸捻転したため、頻回の嘔吐を呈したものとおもわれた。

12 間質性肺炎合併、高齢者肺癌の1切除例

佐藤征二郎・富樫 賢一
長岡赤十字病院呼吸器外科

症例は80歳、男性。平成14年より胸部X-p・CT上、間質性肺炎を指摘されていた。19年6月のCT上、右肺下葉に一部充実性の結節影を認め、20年3月のCTでは同結節影の増大あり当科紹介された。既往歴なく、喫煙指数は2200。理学的所見上、両側下肺に捻撥音聴取し、PSは0であった。血液検査所見では、LDH、KL-6の上昇を認めた。呼吸機能検査では%DLcoの軽度低下を認めた。画像所見上、右肺下葉S10領域の蜂窩肺内部に25mm大の結節影を認めた。リンパ節、遠隔転移を疑わせる所見はなく、右肺癌疑い、臨床病期I Aの診断とした。高齢、間質性肺炎合併症例であり部分切除の方針とした。術後経過良好で、第7病日独歩にて退院した。術前所見より術後合併症の発現を予測することは困難で、術式選択に苦慮した1例であったため報告する。